

先週の礼拝メッセージ(2023年6月4日) ベン牧師

「喜びと賛美」 詩篇 95:1-5

詩篇 95 篇から 100 篇は、礼拝の詩篇と呼ばれ、神殿における礼拝で用いられた賛美です。95 篇の 1 節には「さあ、主に向かって、喜び歌おう。救いの岩に喜びの声を上げよう。感謝のうちにその前を進み、賛美と共に喜びの声を上げよう。」とありますが、賛美の基本は喜びです。なぜなら、神様の恵みのゆえに神の民は選び出されているからです。私たちのためにもイエス様は十字架にまでかかって私たちを救ってくださったのです。神様の憐れみ、イエス様の十字架の赦しがなければ、私たちが神に近づくこともできないのです。

1、2 節を聖書協会共同訳では「喜びの声を上げよう」と訳していますが、原語では「喜びの叫びを上げよう」となっています。皆さんは賛美と共に喜びの叫びをあげていますか？ スポーツファンの人は、自分の応援するチームに点が入る、あるいは勝利すると体全体で喜んで大きな声を出しますね。まさにこれが喜びの叫びなのです。私たちクリスチャンは、スポーツの勝利とは比べものにならない「救い」を受けているのです。その当事者はまさに「私」です。イエス様は私のために十字架にかかってくださったのです。これ以上の喜びがあるでしょうか。

賛美とは、いわゆる「讃美歌」を歌うことではありません。私たちの心が喜びに満ちあふれ、神をほめたたえる言葉が口からあふれ出るのが賛美です。ですから、心の中に不平不満を持ちながら、口で讃美歌を歌うことがあるとしたら、それは賛美とは言えません。喜びの叫びは心の底から湧き上がってくるものです。先ほどのスポーツの応援にしても、なぜ応援しているチームが勝つと喜ぶのでしょうか。それは、応援している私とそのチームが同化するからです。チームの勝利は私の勝利となるからこそ、大喜びできるのです。クリスチャンにとっては、内におられる主と同化する喜びが賛美となつてあふれるのです。

「私たちは皆、顔の覆いを取り除かれて、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに変えられていきます。」(コリント 11:3:18) 昨日より今日、今日より明日、私たちは主に近づくのです。イエス様と同化し、私の内で主を崇める思いがあふれ、賛美が喜びの叫びとなるのです。

時々、この賛美は歌えないとか、私の好みではないとか、そういう声を聞くことがあります。そのような態度を神様は決して喜ばれません。

「賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。」(ヘブライ 13:15) 聖書で賛美をくちびるの果実と言っています。どんな曲風であっても、イエス様は心からの賛美を、甘くて美味しいさげ物として受け取ってくださるのです。

ところが、6 節から終わりまで読み進んでいくと、今までとは様子がガラリと変わります。6、7 節では礼拝に対する姿勢が記されています。主の前にひれ伏し、主こそ我らの神と崇めよう。私たちは牧場の羊であると。そして 8 節には、エジプト脱出後の荒野でのイスラエルの民のように、心を頑なにしてはいけないと警告しています。イスラエルの民は、飲み水がないと不平を言い、エジプトでの生活を懐かしみ、神を試みたのです。そしてついに神様は、「私は怒り、誓いを立てた。『彼らは私の憩いに入れぬ』」(11 節)とおっしゃいます。この言葉で詩篇 95 篇は終わっています。なんと礼拝の賛美で、神の怒りを歌ったのです。

この一節は、ヘブライ書にも引用されています(ヘブライ 3:7-11) イスラエルの民が、奴隷から神の民とされたのに、その恵みを忘れて神に不平不満をぶつけたことを引用して、彼らのように心を頑なにしてはいけません。聖霊の声に逆らって不信仰に陥ってはならないと警告しているのです。聖霊は、私たちが従おうとする時に働いてくださるからです。だから救われていること、神の民とされたことを、心から喜び叫ぼう、私たちは神と一つなのだからと詩篇は呼びかけているのです。

私たちはどうでしょう。まずは内側を点検し、神様の前に悔い改めるべきことは、素直に主の前に出て赦しを得、そして罪赦された喜びをもって心から賛美を捧げようではありませんか。賛美は喜びと同時に、悔い改めの機会でもあるのです。私たちが救いの喜びをもって心から主を賛美する時、その賛美を主はどんなに喜んでくださるでしょう。曲に乗せて歌うだけでなく、「ハレルヤ」「感謝します」、その一言も主への賛美です。

私たちは本来「私の憩いには入れぬ」者でした。しかしそんな私たちが神の民とされたのです。この恵みを喜び叫ばずにはられません。「ハレルヤ！ 主よ、感謝します。」

